

# 障害者福祉援助論

- これから現場に行くあなたに！ -

第10回

## 家族支援について考える

千葉 晃央

### これまでを理解する

障害を持った子どもさんがおられる家族に出会ったときに、理解しておくべきことがある。それはハンデのある子どもを産んだことを母が責められているかもしれないことである。支援者はご本人にかかわっていると、家族に「もっとこうしてくれればいいのに…」と思いがちである。その矛先になりがちなのは母だろう。そして、支援者が家族への要望を短絡的に向けること自体は避けなければいけない。

母は十分に自分で自分自身を責めていることがほとんどである。妊娠前に飲んだ薬がよくなかったのではないか、ぎりぎりまで働きすぎたのではないか、自分が遺伝的な要素を持ち合わせていたのではないか、あの時転んだからではないか、たばこを吸っていたからではないか…。こうした考えに明確な答えは出ないし、出せない。だからこ

そ、永遠にぐるぐると頭の中で回り続ける思考なのである。その思考も持ちながら、我が子を日夜育ててきた。

さらに周囲からの視線や問いかけにもさらされた経験があることも多い。息子があの嫁をもらったから、こうなったのではないか…と夫側の実家親族からの声をきいた母も少なくない。特に障害者への理解という考え方が広がる以前であればさらに強い。上世代の方々はこうした障害への理解を学ぶ機会も少なく、その結果としての辛辣な態度や物言いは際立つこともあるように見える。

### 出生順位とケア役割

きょうだいには、ある時期までは上の子が下の子の手伝いをすることがある。その時に上の子が女の子であれば、特におままごとの感覚で自然とそ



うなることもある。上が兄であれば、ボスのように「面倒をみる」こともあるだろう。しかし、逆に面倒くさがることもあるだろう。それでもできる人が不慣れな人をサポートするのは、自然な行動として生起する。そこにはベースに親の期待や指示もあるかもしれない。また、親の姿を見ているからサポートするのは自然ということもあるかもしれない。こうした下の子どもさんがハンデを持つことがあれば、それは自然発生的に年長者から下のきょうだいへのサポートが起こりやすい。

逆に上の子にハンデがある場合、ある時まですごかった兄や姉を下の子が追い越す時が来る。それまでに、もし意地悪をされたや偉そうにされたなど下の子が感じていたならば、自分の方ができることが増えても手伝おうということになりにくい傾向が起こるだろう。

この頃は、「きょうだい児」という言葉が障害を持つきょうだいがいる境遇を表現して、普及して

いる。きょうだいのケア役を期待され、一方的にその役を押し付けられた経験を語る方もいる。ヤングケアラーにもカテゴライズされ、また注目がされている。

こうした家族間での力動を危惧して、ハンデのあるきょうだいへのサポートを一切きょうだいにはさせないと頑張る親にも会うことがある。

## 集団圧力の強い国、ニッポンでの決断

1970年に横浜市金沢区で起きた母親による障害児殺害事件があった。ケアの負担、制度の不備の中で母に同情が集まり、地元町内会等による減刑嘆願運動も起こった。それに対し障害当事者の方々が自分たちは殺されてもいい存在なのか、命の価値が低いのかと抗議し、厳正判決を求める運

動も展開され、障害者当事者運動の契機の一つとなった。背景として、地域社会の障害者差別意識こそが母を追い込んだということも指摘された。

現代では、出生前診断に関する医療技術が進み、妊娠中に胎児に障害がある可能性を診断することもできるようになった。とはいえ、当然 100%ではない。その中で、検査をするのか？結果が分かれば、産むのか？産まないのか？判断することが親には求められる。そんなことは、人類史上初めての人間への問いである。医療技術の進歩が私たちに新しい判断を課しているのである。このあたりは対人援助学マガジンの荒木晃子さんの連載が詳しい。ぜひ、合わせて読んでもらいたい。

つまり、よい命と悪い命があるのか？生まれていい命と生まれてはいけない命があるのか？それを親が自ら決めることができるのか？それを誰がきき、誰と共有し、誰と決めるのか？すべては命がけの話である。

このあたりでのカップルのズレは大きな影響を及ぼすことも多い。父の対応への母側の不満は、母は一生忘れない。人生の2つの命(母と我が子)がかかると一番のピンチをカップルでどう向き合ったのかである。そこには、上世代からの介入、医療に関する判断、費用のことから立会出産か否か、こうした希望が母にはあったのか、その結果当日はどうなったのかなど様々なことが関連している。

## 2つの命をかけた子育てへの敬意を示す

里帰り出産なのか、しかも母の地元での出産なのかによっても母のソーシャルネットワークの量も質も大きく左右される。気を遣う父側の実家での出産であれば、それがどう決まったのかも物語が必ずあり、その影響も大きい。



1970年代の映像では、都会の駅でのラッシュ時に車いすを担いで階段をあげてくれないかと、障害者自身が頼むシーンがある。現在では、エレベーターがある駅が当たり前になりつつあるが、その契機は、当事者や、その家族からの電車等の交通機関への働きかけによるものといつてよい。こうした歴史も理解し、その歴史経過の中で目の前の家族がハンデを持つ子と向き合っていることを忘れてはならない。

第1子でハンデをもって子どもが生まれた時に、次の子どもを設けることを躊躇することもみられる。できれば元気に生まれて、育ててほしいと思うのは親心として当然あり、自然であろう。その上で、現実に対して夫婦で子どもを設けることに関して、どう考えて、どう取り組んでいくのかもテーマになる。何らか夫婦で決めていることも多い。

「どんなふう乗り越えたのですか?」「どんな工夫があったのですか?」「誰が協力してくれたんですか?」「何が助けになったのですか?」…こうした解決志向アプローチ、ナラティブアプローチで用いられる質問も面接ではぜひ使って欲しい。家族支援の目的は自分たちで家族のことは乗り越えられると思えることも一つのゴールである。家族は実際に現在まで何とか切り抜けて、子育てをし、家族を営んでいる。そのストレングスが意識できることが家族の自信であり、未来へのエネルギーになる。そうした面接ができるよう心掛ける必要があるだろう。

## **BACK ISSUES**

### **「障害者福祉援助論」**

**対人援助学マガジン 43号**~/2020年12月~

### **「付け加えることができる価値は何か?」**

**対人援助学マガジン 52~58号**~/2023年3月~2024年9月

### **「援助職の未来 1~2」**

**対人援助学マガジン 41~42号**~/2020年6月~2020年9月

### **「対談企画 教育と福祉の連携を模索する」**

**対人援助学マガジン 16号**~/2014年3月

### **「障害を持つ友達と過ごすとは? 巻末座談会」**

**対人援助学マガジン 6号**~/2011年9月

### **「1工程@1円~知的障害者の労働現場 1~40」**

**対人援助学マガジン 1号~40号**~/2010年6月~2020年3月